村上 詠子 *Eiko Murakami*
目白研心中学校・高等学校教諭

グローバル社会と主体的学び

―変革期の教育と学びの「場」―

1 はじめに

教育の変化が急速に進み、21世紀の教育は時間短縮の空間的移動と言語についての見方、考え方、価値判断の双方向的言語観移動が求められ、[註1]言語教育カテゴリー間移動の教育型に変貌している。まさに21世紀は教育においても移動の時代を迎えたといえる。

しかし、基本的学習や基礎教育不足の原因が学力低下に結びつき現代社会が求める人材教育に並行していない。従来の暗記型勉強法は、学習（修）を工夫する学ぶ力の育成に移行していく。その育成には、学習（修）者本人が自発的に習得し蓄積した知識が必要となる。

21世紀は開発型教育がグローバル教育を推進し、学習（修）者の精神的成長を伴う学習の場の拡大を実現し

ようとしている。学びの本質は知識の発見と創造であり、教育においてはその探求プロセスが重要となる。変動・流動的な世界では拡大した意識で地球規模の問題解決が必要となる。

日本の高校教育、大学教育、大学入試の変革は国際化のもと世界のレベルに教育を引き上げ、グローバルリーダーの育成を考えた変革である。ESD（Education for Sustainable Development）などは新たに発生した持続可能な開発のための教育である。学びの場が新たな教育環境を創造し、学習（修）者の高度な意識の構築と能力の向上を充実させることにより、グローバルな環境に対応できる人材育成が求められている。

このような現状において、本稿ではまずグローバル化社会が生み出した変革期の教育について検討し、有機的な学習（修）が学習効果を高めることを示した上で、学習と学修の違いについて教育構造を明らかにし、最後にそのような中での「学びの場」がどのような意味を持っているのか検討していく。

2 有機的な学習（修）

（1）学習（修）エネルギーの発生する場（磁場）

教育においてしばしば「学習の場には磁力が生じる」と表現される。本来は物理学概念で、時間の概念と同様に磁場は実在しない。磁石のような性質があるところを磁場、磁極間で発生した磁気力の空間でエネルギーが満ちた場を磁場（磁界）とよんでいる。学習環境は、学習（修）者にとって考えるという重要な学習（修）空間であり学習場所となる。学習（修）者自身が、学習の場や学習（修）への権利をどう捉えるかで、学習（修）そのものは受動的か能動的かになり、学習（修）者の教育の位置づけが認識によって重要な学習（修）空間となり学習（修）の場、エネルギーが満ちた磁場に変わる。その場所で学習（修）者は学習能力のエネルギーを蓄えることになる。

言語活動などは良い例で、多言語多文化を含んでおり多文化共生を必要とする学習（修）である。グローバル化は個人と社会を相互作用の関係で発展させる。「学校教育や広く教育活動というものは、誰もが成功するという目的に基づいていなければならない」（Gardner, H）[註2]・「複数の認知形態を学生が統合していく手助けの方法が見つけられれば、私たちは学生を教育できる立場にいることになる。」（Gardner, H）[註2] という提唱から、学習（修）を有機的に組織する方法は多角的で多種多様なアプローチを必要とするものである。学校教育や教育活動は、学習（修）者の自律的（Ipsatively）な活動を目指すものである。学習（修）者が有機的な学習（修）を行うには、目標と計画を実行できるスキルを必要とし、主体的に考える力と高度な学習効果を伴う能動的な態度が必要となる。

（2）グローバル社会とグローバル人材

グローバル社会のグローバル人材の育成には、まず学習（修）者自身の意識改革が重要である。学ぶための能力の向上は、知識の構築となり主体的な学びの場となる。思索や理解力は、学習（修）者自身が学ぶ過程で習得していくものである。

そもそもグローバル人材とは、「語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極生・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としての自己同一性（Identity）を構築された人材で、社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークとリーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を要素に持つ人材」（文部科学省2011.6）と定義されている。[註3]

そこで、グローバル社会のグローバル人材の条件に、社会人基礎力「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」（産業経済省2006.2）として３つの能力・12の能力要素の定義が成されている。能力１）Action＜要素＞主体性・働きかけ力・実行力、能力２）Thinking＜要素＞課題発見力、計画力、創造力、能力３）Teamwork＜要素＞発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力を表記している。要するに、社会人基礎力には基礎学力と専門知識を活かす力が必要であり、それらをもとに人間

性や基本的な生活習慣を構築する能力の育成が必要とされるということである。

（3）学びの場はどこにあるのか？

グローバル社会では、オンライン環境の学習支援により学習（修）の場を広げ、学習（修）者の能力向上の育成を考えている。日本の大学においては、世界トップ100に10校入るという目標（文部科学省は国立大学改革プラン）を立て、世界に通じる学習（修）者能力の育成プログラムとして国際バカロレア（International Baccalaureate）を利用している。国際バカロレアは知[註4]識基盤社会を定義し、OECD（経済協力開発機構）は「コンピテンシーの定義と選択」[註5]（DeSeCo : Definition and Selection of Competencies）というプロジェクト（1997）をスタートさせている。大学教育に質的転換を促し、学[註6]習から学修への変更は深い理解を目的としたものである。

学習（修）方法の一つとしてあげられるActive Learningは、Student Engagementの定義（L・ディー・フィン[註7]ク）があり、学びと動機付けが重要なものとされている。カール・ワイマンの事例によると、Active Learning[註8]ではクラス出席率18％（57％→75％）、授業関与率40％（45％→85％）に増加し、Active Learningでの学習成果にも変化が現れており、日本の大学教育改革が行われた所以である。大学においての学びの本質は主体的な学びの形成である。学習（修）者が主体的に学習（修）を行うことによって学びの場は確保でき、どの場においても学習（修）エネルギーは発生し、学習（修）者自身で能力の向上を図ることができる。

3 学習と学修の違い

（1）大学で何を身につけるのか

世論調査で、「日本の大学は、世界に通用する人材や企業、社会が求める人材を育てているかとの質問に、6割を超える国民が否定的な回答をしている」[註9]（2011）、「チームで特定の課題に取り組む経験をさせる、理論に加えて、実社会とのつながりを意識した教育を行う、に[註10]対して差異や隔たりがある」・「学士課程教育を受けている学生の5～6割が、論理的に文章を書く力、人にわかりやすく話す力、外国語の力についての大学の授業の有効性を否定的に捉えている」と報告されている。

社会の変化が有能な人材の育成を要求している現今、大学に期待が寄せられる。大学改革は社会の変化に応じた能力を育成する目的があり、人格育成とグローバル人材の育成のために学修者には専門知識の理解・高教養、専門領域の基礎知識、問題解決能力、応用力、語学力の修得が求められている。個人の基盤が学習（修）によって発展すると考えられていたのは社会のグローバル化以前であり、現代社会では専門的知識を習得するめの能力と知識の知的財産の蓄積がグローバル社会の価値の創造につながる。大学で学ぶべきこと、それは課題解決型の能動的学修（Active Learning）によって培われる能力の育成といえる。

（2）高校と大学は学び方が違う

高校と大学は学びの場も学び方も学ぶ内容も異なる。高校の学びの場と校内生活の場は主に教室となる。学習は、教科書を中心としたカリキュラムで一斉授業がクラス単位で展開し、テストによって学習の能力評価がされる。読解力学習が中心だった英語学習は、近年Active Learningを取り入れた高校が増えており、英語力＝グローバル＝グローバル人材の育成を意識した教育構造が形成されている。

大学は、高校時代のスクール・スタイルとは活動範囲が異なり、Self-Performed Actionによってキャンパス全体が学修の場や活動の場の拡大を容易にする。学修は、シラバスを参考に時間割を編成し、講義・演習・実習・ゼミ形式・インターンシップ・オムニバス形式の授[註11]業の展開により、新ビジョンの創造と構築方法を学び結論を導き出していく。大学では英語以外の言語学習が習得でき、グローバル人材の育成を目指している。大学での学修は、自己計画と自主性によって学修者自ら学びの場を創造し、学びのエネルギーを集積し修得する場である。

（3）勉強の基本は高校時代の理解

Active Learningを基に「人間という存在の本質や人間の社会的行動に関する普遍的な価値に基づいた行動的なグローバル民主主義の実現に向けた教育をも送り届けていく」（M. スタイナー[註12]）という提言は、民主的な学びの場においてCommunication、Open-Mindedness、Listeningといったシティズンシップ（Citizenship）の基本的技能を求めるものである。それは、学習（修）者自身が省察的教育（Reflective Teaching）から得られる洞察力、想像力、批判力である。

学習意欲の低下や学力低下の原因に、高校時代の基本姿勢として理解への判断力の育成が乏しいことがあげられる。専門分野に進むためには、高校終了までに思考力・判断力・表現力等の能力育成は必須である。学ぶためには理解が必然であり、理解することで自身の指針を見いだすことができる。理解は自身のビジョンの構築に重要な能力となるもので、大学での修学には必要な能力である。

（4）グローバル・スチューデント（Global Student 表1）

グローバル教育には、経験と理論的認識で問題を思考し、判断と技能から学習（修）を習得するといった利点がある。グローバル教育に必要とされる学力が批判的思考（Critical Thinking）であり、そのグローバル教育に効果的な学習（修）方法の一つが、Active Learning（村上2014）といわれている。グローバル人材の育成には、Active（主体的・能動的）・Interacivity（双方向性）が自律的・協働的な学び方であり、主体的学習（修）、発見・解決学習（修）がコミュニケーションを通し行われることにより、学習（修）者の資質や能力、教育のあり方の変容をみせている。現状では、SGH（Super Global High School）、SSH（Super Science High School）、Super Global大学などがある。大学教育の変革により、その教育の変革に耐えうる人材を入試で選別すると考えた入試変革である。また、高等学校では授業を主体的にコントロールする学習集団の上位20％を占めるActive Learningは、京都市立塔南高等学校国語科（現代文）、長野県中野西高等学校（数学）、立命館宇治中学校・高等学校（英語）、東京都立国立高等学校（理科）、新潟県立安塚高等学校（地歴・公民科）などで実施されている。

表1 グローバル・スチューデントの資質

	学習（修）者	学習（修）者への支援
全体	・積極的であること ・意見・経験を生かせること ・計画や意見に敏感に対応できること ・議論に対し自分を見失わないこと ・文化の様式を固定的に決めつける（文化的ステレオタイプ）ことをしない	・意見・順番・責任の所在を確認させる ・意思決定の促進・方法のあり方を考えさせる ・権利や責任の所在を確認させる ・民主的参加が出来るようにする ・将来の自分について考えさせる ・自立した学びの促進
個人	・立場や観点を意識できる ・自分自身の立場や観点に敏感である ・社会文化的経験に敏感である ・多様な情報源を批判し、物事の理解に繋げられる ・相互の権利・尊重の必要性を認識している	・多種多様な気づきの機会を与えられる（ロールプレイ、シミュレーション） ・意見の承認・修正の奨励 ・多分野・多議論・多様な意見の気づきの奨励 ・民主主義社会の基本を理解させる

（5）to knowからto understandへ

International Baccalaureate（表2）の探求は、to knowからto understandの思考と行動（Active Learning）を伴う概念であり考えることである。[註13]ブルームは、教育の目標領域を認知（Knowledge）・情意（Skill）・精神運動（Attitude）の3領域（1948. 表3）で表しており、教育内容を体系化し完全習得学習（修）に有効とされている。それについては、機械的暗記型・言語主義的教育（1948）

表2 International Baccalaureateの教育

修得	学習（修）	人格形成
国際的な視野をもった人間の育成	人間らしさ、地球を守る責任、平和な世界の構築	IBの学習者像
好奇心の育成。探究・研究スキルの修得	個人・協働・生涯学習（学修）	探究する人
概念的理解・幅広い分野の知識の探究	地域社会やグローバル社会の重要な課題や考えに取り組む	知識のある人
問題の分析・責任行動に、批判的・創造的に考えるスキルの活用	理性的・倫理的な判断	考える人
複数の言語使用・創造的な表現	ものの見方に傾聴・効果的な協力	コミュニケーションができる人
誠実・正直・公正・正義感・尊厳・権利の尊重と行動	自分自身の行動と結果に責任を持つ	信念をもつ人
自己の文化・個人的な経験・他の人々の価値観・伝統の真価を正しく受け止める	多様な視点・価値・経験を糧に成長	心を開く人
思いやり・共感・尊重の精神	人の役に立つ・世界を良くするために行動	思いやりのある人
熟慮・決断力・協力・考え方法の探究	機知に富んだ方法	挑戦する人
知性・身体・心のバランス	世界と相互依存	バランスのとれた人
世界・自分の考えや経験を深く考察	教養の基礎	振り返りができる人

表3 ブルームの教育目標分類学（教育目標のタキソノミーの全体的構成）

6.0	評価Evaluation		
5.0	統合Synthesis	個性化Characterization	自然化Naturalization
4.0	分析Analysis	組織化Organization	分節化Articulation
3.0	応用Application	価値づけValuing	精密化Precision
2.0	理解Comprehension	反応Responding	巧妙化Manipulation
1.0	知識Knowledge	受け入れReceiving	模倣Imitation
	認知的領域	情意的領域	[註14]精神運動的領域

表4 グローバルリーダー育成のSGH認定校

学校名	グローバルリーダー育成
品川女子学院中等部・高等部	企業マインドを持つ女性リーダーの育成。自ら考え、自ら表現し、自らを律する。内省力と共感力を持つリーダーの育成。身の回りの問題を解決する家庭科授業。集大成として起業を実践
横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校	サイエンスの分野で活躍できる人材の育成。サイエンスとグローバルを切り分けないリベラルアーツの精神、一年次にサイエンスとグローバルに対するリテラシーを身につける。全員が英語で研究成果を発表
公文国際中等部・高等部	グローバル人材としての基礎と模擬国連。総合学習で基本トレーニング。模擬国連を軸とした実践演習。教員に求められる知的リーダーシップが要求される
長野県長野高等学校	グローバルリーダー育成。SGHのカリキュラム進学実績との両立を目指す　ローカルからグローバルへ

がその背景にあった。

現在、グローバルリーダー育成のSGH認定校（表4）に、品川女子学院中等部・高等部、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校、公文国際中等部・高等部、長野県長野高等学校が上げられている。

Active Learning（村上2015）は、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、Group Discussion、Debate、Group Workから、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験などの能力育成が図れる。そのため、大学入試変革に伴い、大学は進学校から、進学校は中学校から、中学校は小学校からActive Learningで育成された能力者を望んでいる。

（6）なぜActive Learning（能動的学習（修））なのか

大学は中央教育審議会答申（2012）後、Active Learningへの取り組みを進めている。大学改革のキーワードActive Learning は、Plan・Monitoring・Control・Skill・Meta認知を起動する自己調整学習（Self-Regulated Learning）となる深い学びである。Active Learningの学習効果は高度な学習（修）方法といえる。自主的な学習は、学習（修）者の能力形成に多大な影響をもたらす（村上2015）。主体的な学習（修）プロセスを繰り返すことで学習（修）能力として定着する。学習（修）が知的に成長する学びの場の創造が重要である。

教育改革は大学のみならず中学・高校に浸透し、小学校教育にまで及んでおり、その教育の手段としてActive Learningが取り入れられている。高校でのDiscussion、Presentation、Research（探究活動）学習の経験は創造的思考力の育成につながる。学習（修）のActive Learning・ICT活用は、MOOC（大規模公開オンライン講座）、OCW（Opencourseware講義の配信）があるが、Active Learningには、学習空間（Learning Commons）やオンライン構築が必要である。現状では、Active Learning spaceのLearning Commonsを構内の図書館に整備している大学は210館（平成23年5月1日現在）と3年間で約2倍に及んでいる。

Learning Commonsの海外での設置大学は、マサチューセッツ州立大学アマースト校、スタンフォード大学のターマン工学図書館、ビジネススクール図書館は電子書籍、電子ジャーナルを充実させるために蔵書を約85％減少させ、グループ学習室、サイバートレーディングルーム、読書スペース等を設置している。テキサス大学サンアントニオ校の応用工学・テクノロジー図書館は、電子書籍、電子ジャーナルの導入を行っている。国内では、慶應義塾大学の理工学部図書館が蔵書を減少させ、グループ学習や学習相談のスペースを設けている。

4 学びの場

（1）学びの場のプロジェクトがいる環境

教育・学び・場は、学習（修）者が求めさえすればいつでも広域にわたり学びと場が確保できる。そこに学びの場を支えるプロジェクトがいれば学習（修）者にとって心強い。

プロジェクトがいる環境の例は以下のとおりである。

慶應義塾大学教養研究センター（ReCLA）は、時代と社会の変化に対応していくためにの能力育成のため、主体的な研究教育活動（2008）を「学びの場プロジェクト」と称し、「多様な価値観の理解、自ら考え、自ら確かめ、「異論」をあえて表現」し「情報を見極める眼力を養い、ことばと精緻に向き合い、身体に還元し、そして批判を創造に変えて社会に伝える」ことを目的として具体的な展開を行っている。

地域の例としては、「土曜まなび場事業」（2012.8）が綾瀬市でスタートして「みんなの学びの場」を設置している。法人では、NPO法人がWEBサイト「manavee」を開発し中高生用の学びの場をつくり「誰もが無料で受験勉強ができる」体制を整えている。

しかし現実には、家庭・家族環境の悪化や多額の学費を必要とする経済状況の中で、入試変革に対応する力や進路選択能力が低下している。リクルートは、全日制高校4898校を対象に[註15]「学校の進路指導・キャリア教育に関する調査」（2014）を行った。有効回答（1179）で、教育現場の進路指導の困難度は9割を実感した結果となった。

本来、学びとは環境に制限されるものではなく、学習（修）者自らが行動し得て行く力・能力でなくてはならない。グローバル社会の求める人材になるためには、自ら学びの場を増やし、社会に求められる能力を自ら育成していかなければならない。そのために、児童生徒・学生の学習（修）者をはじめ社会人の学びの場も必要となる。近年では、社会のニーズに対応し「仕事の学び場」として、専門学校等もますます門戸を開いており、その多様さは制限を越えて学習（修）者によって柔軟な学びの場を作り出せるようになってきている。

（2）学び方の姿勢

近年の人材育成にも変容がみられ、課題解決の技術力と課題発見の精神を保持した自走型人材の育成が考えられている。そのためには、学習（修）者の意識のなかの感覚の発達を促進させる必要がある。そもそも学びとは、学習（修）者が自ら知識を創造する学習（修）である。その学びの場は、学習（修）者が主体となり自分を創造できる場であり、知識の拡大を約束された場所となることが重要といえる。

実際に、2020年のプログラミング義務教育に向けて、中学校・高校のプログラミング教育に取り組んでいる所もある。また、現今、職業体験キッザニアやIT技能キッザニア、中学生女子が開発した「見えるプレゼンタイマー」、女子高生が開発した「STUGUIN（スタグイン）」など中高生向けプログラミングスクール、経済・地域格差の解決のためのプログラミング学習（修）『MOZER』（オンライン授業）など学びの場は領域を拡大させている。

5 おわりに

学びの場は、学習（修）者の主体的な学びによって創造できる学習（修）環境が構築された場所である。能動的学修の概念の形成に、考える教育を展開しているカナダのクイーンズ大学がある。この大学は、学習（修）環境を学習（修）の場の確保、空間の拡大といった多様性重視の教育の場を創造し、効果的な学習（修）の展開や拡大した教育の場に相応しいActive Learningを導入している。

思考は教養によって鍛えられる。自学習に取り組む際、学習（修）目標と学習（修）計画が不鮮明な学習（修）者は行動を起こせない。また、具体的なスキルを必要とするのが学習（修）である。学習（修）状況や理解度を自己評価できる能力の育成には、多くの複雑な要素を含む学習（修）活動が重要である。日本でも近年、能動

的学習（修）形態を重視するようになり、大学では能動的学修（2012.8. 中教審答申）の推進を始めている。そもそもActive Learningは、アメリカで注目（1991）した学習（修）法である。主体的学びは深い学びであり、知識を学習成果に取り入れて展開させる教育である。しかし、日本でいうActive Learningは校外学習の授業形態と同一であり、教室内で事前準備学習を行い教室外学習に転換させた学習を能動的学習としていることが多い。

グローバル教育の推進には教育の場の拡大が必要となる。価値観や学習（修）課題を追及するグローバル教育とActive Learningの方法論は共通する。Active Learningは、5つの力の育成を可能とし12の態度を育成すると考えられている（表5）。Active Learningの重要性に伴い、2018年までに国際バカロレア（IB）の導入校を200校に増やすプロジェクトがスタートしている。

グローバル社会の形成で、我々はより多くの情報をより多くの人に論理的に伝えなくてはならない。グローバル社会を地球市民と考えれば多民族社会の中の個人とな

表5 Active Learning 5 Skills 12 Atitude

	Skills	Contents	Atitude
1	Thinking Skills 考える力	Acquisition of knowledge/Comprehension/Application/Analysis/Synthesis/Evaluation/Dialectical thought/Metacognition 知識を獲得すること・理解すること・応用すること・分析すること・統合すること・評価すること・弁証法的思考をすること・メタ認知すること	Appreciation Commitment Confidence Cooperation Creativity Curiosity Empathy Enthusiasm Ndependence Ntegrity Respect Tolerance 感謝・責任・自信・協調・創造性・好奇心・共感・熱意・自主性・誠実・尊重・寛容
2	Social Skills 社会性	Accepting responsibility/Respecting others/Cooperating/Resolving conflict/Group decision-making/Adopting a variety of group roles 責任を引き受けること・他の人を大切にすること・協力すること・対立を解決すること・集団で意思決定をすること・集団内でのさまざまな役割を負うこと	
3	Communication Skills コミュニケーション力	Listening/Speaking/Reading/Writing/Viewing/Presenting Non-verbal Communication 聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・見ること・発表すること・言葉以外でコミュニケーションすること	
4	Self-management Skills 自己管理力	Gross motor skills/Fine motor skills/Spatial awareness/Organization/Time management/Safety/Healthy lifestyle/Codes of behaviour/Informed choices 全体としての運動スキル・細かい運動のスキル・空間を認識すること・組織すること・時間を管理すること・安全であること・生活が健康であること・行動規範を持つこと・情報に基づく選択をすること	
5	Research Skills 調べる力	Formulating questions/Observing/Planning/Collecting data/Recording data/Organizing data/Interpreting data/Presenting research finging 質問を立てること・観察すること・計画すること・データを集めること・データを記録すること・データを整理すること・データを解釈すること・調査結果を発表すること	

る。国際化は、人間関係やビジネスに論理的な説得と論理的な交渉を必要とする。論理的思考の重要性は増すばかりである。

多くの経験は、自由な発想で物事を多面方向から直感的に捉え、広く浅く全体を把握する水平思考（Lateral thinking）とデータや根拠を積み重ねて特定な部分を深く分析する垂直思考（Vertical thinking）を可能にする。世界に通じる論理、理解力、創造力、表現力を鍛える学習（修）法は、必然的に未来に通じる学習（修）となる。多様な学習（修）の場は、自らの学習（修）によって学習（修）エネルギーを発生する磁場となる場所に創造されるべき場である。

【註】

1） 国語教育、外国語教育、第二言語教育、継承後教育
2） ハーワード・ガーナード「多重知能論」を提唱（原注Gardner, H. the Unscbooled Mind,London: Fontana. 1991./ 訳 注 Howard Gardner, 1943～）
3）「グローバル人材の定義」グローバル人材育成推進会議 2011.6
4）「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」
5）「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含むさまざまな心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することが出来る力」（文部科学省のhp）
6）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」中央教育審議会答申　2012.8.28
7） 米国FD研究・実践者・元PODネットワーク会長　帝京大学高等教育開発センター　2012.7.21.（『教育学術新聞』（2012.8.8））
8） アメリカ・ノーベル物理学受賞　『サイエンス』（2011.5）掲載論文
9） 朝日新聞社「教育」をテーマにした全国世論調査結果（2011.1.1【18面】）
10）経済団体の調査　2011
11）１つのテーマを複数の教員がリレー形式で多角的に講義を行う
12）M・スタイナー 教育者『地球市民教育のすすめかた　ワールド・スタディーズ・ワークブック』、明石書店、一九九七年、四三頁。（原題: Making Global Connections, A World Studies Workbook, 1989）
13）Bloom, et. al, 1956第一巻『認知的領域』1956年公刊、第二巻『情意的領域』1964年公刊（Krathwohl, Bloom, & Masia, 1964）、第三巻『精神運動的領域』1970年代定説に至らず
14）ブルームの弟子のダーベが1971年夏スウェーデンで開かれた「カリキュラム改革に関する国際セミナー」において示したもの。
　出典：梶田叡一（1983）「教育評価」有斐閣、表3-1、p112（英語は同書などから加筆）
15）出典「『高校の進路指導・キャリア教育に関する調査』概要」2014　リクルート・キャリアガイダンス　NO.45）

【参考文献】

・『学力があぶない』大野晋・上野健爾著　岩波新書　2001
・『言語教育とアイデンティティ』ことばの教育実践とその可能性　細川英雄編　「「移動する子ども」からことばとアイデンティティを考える」川上郁雄（早稲田大学）　春風社　2011
・『グローバル・ティーチャーの理論と実践－英国の大学とNGOによる教員養成と開発教育の試み』明石ライブラリー146　ミリアム・スタイナー編　明石書店　2011.7.10
・『自然を体験する』教育フォーラム９　人間教育研究協議会編　金子書房　1991
・『大学教育－越境の説明を育む心理学』冨田英司　田島充士著　ナカニシヤ出版　2014.3
・『変わる学力、変える授業。－21世紀を生き抜く力とは』髙木展郎著　三省堂　2016.1
・『学びとは何か－探求人になるために』今井むつみ著　岩波新書1596　2016.4
・『アクティブ・ラーニング時代の教師像』堀裕嗣・金大竜著　小学館　2016.3
・『高校教師のためのアクティブ・ラーニング』西川純著　東洋館出版社　2015.11
・『通常学級のユニバーサルデザイン　フランZero２　授業編』阿部俊彦編著　東洋館出版社　2015.9
・『アクティブ・ラーニングとしての国際バカロレア－「覚える君」から「考える君」へ』日本標準ブックレットNo.17大迫弘和著　日本標準　2016.2
・『アクティブ・ラーニング』シリーズ大学の教授法３　中井俊樹著　玉川出版　2016.1
・「海外子女教育７」月刊海外子女教育編　海外子女教育振興財団　2016.7
・『アクティブ・ラーニング入門－会話形式でわかる『学び合い』活用術』西川純著　明治図書　2016.1

・『文章書けますか』讀賣新聞社　2016.7
・「アルカディア学報」（教育学術新聞掲載コラム）No.499 中教審答申を授業改善に繋げる＜１＞～能動的学修を促すファカルティ・ディベロップメント～　土持ゲーリー法一　帝京大学高等教育開発センター長・教授
・「教育評価法ハンドブック：教科学習の形成的評価と総括的評価」ブルーム他　渋谷・藤田・梶田訳　第一法規出版　1972・1974
・「主体的学びとは何か」主体的学び研究所　顧問 土持ゲーリー法一